

卒業の日に贈る言葉

激動の社会に旅立つ卒業生の皆さんへ



中央大学学長
河合 久
KAWAI Hisashi

この春、中央大学学士の学位記を手にする卒業生の皆さんに対し、本学在籍中の研究、文化、スポーツ、ボランティア等の様々な分野での活躍を讃えますとともに、ご卒業を心からお祝い申し上げます。また、ご子女に対し、惜しめない支援と応援を送っておられるご家族・ご関係の方々に敬意を表しますとともに、我が事のように本日をお慶びのことと拝察いたします。ご卒業、誠におめでとうございます。

卒業生の皆さんは、コロナ禍の先行きが不透明で不安を抱えたまま入学し、また、他国での戦争による経済情勢や日常生活への悪影響が顕在した中で学生生活を送ってこられました。本学はこの間にも正常な学びの環境を整える努力を惜しみませんでした。それにも増して皆さん自身が状況を的確に判断して柔軟に対応されてきたことが学位記に結実したのだと、学長として歓喜に堪えません。不自由な環境においても、皆さんは教授陣や友人との関わりの中で、今後迫る激動の社会にも通用する発想の転換力や創出力を身につけたのではないかと思います。

私たちは、得意分野や当面の仕事にこだわらず、異分野との融合、そして、まったく新しい人間関係や組織間の有機的相互関係をもって、新たな世界を共創していく時代に直面しています。日本の人口減少と少子高齢化、世界の産業構造や国際関係の急速な変容が、今日の激動する社会の背景にあることに鑑み、世界の平和と発展は将来を担う皆さんの双肩にかかっています。皆さんは決して受け身であってはなりません。大学で得た知識や問題解決へのアプローチは、どのような分野のものであっても、私たちの現実世界に当てはめて解釈し、応用することが可能です。

中央大学で学び、今日ここに手にした学位を胸に、学生生活から得た成果を確認し、それを新たな世界に価値あるものとして実装できるよう心掛けていただくことは、自分の存在価値を能動的に示す最も合理的な態度だと考えます。そのことこそが本学のユニバーシティメッセージである「行動する知性。」を、ご自身によって体現することになるからです。

結びにあたり、皆さんには、中央大学の卒業生であるという誇りをもって、これからの人生を堂々と歩み、くれぐれも健康に気を付けて、元気に活躍されることをお祈り申し上げます。

正義を追及した学びの時間を胸に



法学部長
遠藤 研一郎
ENDOOU Ken-ichirou

中央大学の学士課程を無事に修められ、晴れてご卒業される皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

皆さんがこの学びの場で手に入れたものは、何でしょうか。その中心となるものは、「専門的な知識」でしょう。ただ、その「専門的な知識」というものが、物知り博士としての「単なる知識」ではなく、より汎用性のある「ものの考え方」であったことを願っています。単なる知識は、やがて忘れてしまったり、陳腐化してしまったりして、使えなくなります。しかし、「学問」と向き合った皆さんが、学問的な思考をしっかりと手に入れたのだとすれば、それは、皆さんがどのような場所に身を置いても、そして何年経っても役立つ財産です。

特に法学部の卒業生諸君へ。民法1条2項を憶えていますか。皆さんご存じの「信義則」の条文です。そもそも、信義則は当初、大きな意義が与えられず、明治の立法期には民法の条文にも盛り込まれていませんでした。しかし、戦後の民法改正で条文化された後は、この原則のコロラリーとして、様々な法理が様々な場面で登場するようになります。エストoppel、事情変更、信頼関係破壊、契約締結上の過失、安全配慮義務、不安の抗弁、買主の目的物受領義務など、様々です。では、なぜ、信義則は、ここまで使われる概念となったのでしょうか。それは、成文法主義である日本においても、形式的な法適用から導かれる形式的な結果とは異なる、実質的な公正・妥当な解決が求められる領域が少なからずあり、そのために信義則という概念が不可欠であったからです。機械処理ではできない「人間臭さ」がここにはあるように感じます。

皆さんの卒業にあたって、私がなぜこの条文を持ち出したのかというと、是非、皆さんが学んできた「法学」という学問を再確認してほしいからです。皆さんの学んだ法学は、単に、今ある法を形式的に理解すれば、それで事足りるわけではありません。法学は、法が動態的なものであること、歴史の中で発展してきていること、その変化はこれからもずっと続くものであることを前提として、よりよい法を探し求める姿勢が必要な学問であったはずで、そしてまた、個別・具体的な人の人生を扱う、人間味のある学問であったはずで、

末筆ながら、今後の皆さんの益々のご活躍を祈念し、はなむけの言葉とさせていただきます。

非難ではなく批判のできる人として



経済学部長
佐藤 拓也
SAITO Takuya

ご卒業おめでとうございます。皆さんの大学生活は、そのかなりの期間において、新型コロナウイルス感染症によって多くの犠牲を強いられるものとなってしまいました。困難の中でも学修や学生生活を続け卒業されていく皆さんに、あらためて敬意と祝意を表します。

4年前の春、皆さんの多くがいよいよ大学入学という時に、国は、法的根拠も科学的根拠も曖昧な一斉休校を小中高등학교に要請しました。多くの大学も、長期の出校停止やオンライン授業という対応を続けました。私は、教育を担う者の一人として、この間のコロナに対する国や大学の対応が、皆さんの貴重な学生生活の権利の保障という観点から見て正しかったのかどうか、今からでも真摯に振り返るべきであると思っています。

ここで皆さんにお願いしたいのは、こうした現実直面した時、これを「非難」するのではなく「批判」のできる人になってほしいということです。よく「あの人は他人の批判ばかりする」などと言う時、そこでは批判と非難がほぼ同義に使われています。しかし、批判と非難は違います。非難は、他人の過ちや欠点をあげつらい、問題の責任を責め立てることです。これに対して、批判とは、その問題状況を分析し、原因や事態の本質を明らかにして、何よりも、それを絶対的に動かし難いものとするのではなく、それを乗り越えて、時には変革さえしようとする態度のことです。

大学の研究者の仕事は、社会現象や自然現象、またその先行研究を対象にして、上のような意味での批判をする仕事です。皆さんは、研究教育機関である大学で学問を修めました。ですから、これから自分の属する職場や地域、社会で様々な問題に直面した時に、非難ではなく、大学で身につけた批判を試みて下さい。動かないと思っていた状況や環境が、乗り越えうるものであることに気付くことも、きっと出てくるはずで、

また、きっちり批判のできる人は、人生で困難に直面した時でも、自分がダメな人間だから問題が起きているのだと自らを非難するのではなく、客観的な事実の中に問題の原因や本質を見出すことができるはずで、これを分析して明らかにしようとする批判的な態度は、きっとこの先、自身をポジティブにし、精神衛生上の助けにもなってくれるはずで、

皆さんが、健全な批判的精神を持って大いに活躍されることを、心より願っています。

ご卒業おめでとうございます



商学部長
井上 義朗
INOUE Yoshio

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。晴れてこの日を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。また、ご家族様をはじめ、これまでの長い年月つねに寄り添い、支えてこられた多くの皆様方にも、心よりお祝い申し上げます。

今期卒業される皆さんは、入学と同時に新型コロナウイルス感染拡大の下におかれ、例年とは大きく異なるかたちで大学生活をスタートされました。キャンパスへの入構は制限され、授業もオンラインで始まり、部活動も制約を受け、さらにはオンラインによる白門祭の開催など、それまで誰も経験したことのない厳しい状況のなかで、大学生活を始められました。今では、ほぼすべての授業を対面形式にもどすことができましたが、皆さんは大学生活の多くの部分を、本来とは異なるかたちで送らざるをえなかったと思います。

それでも皆さんは、そうした状況に屈することなく、立派に学業を修めて、今日の晴れの日を迎えられました。どうぞこの間の努力と経験に自信と自負をもって、新しい世界へと羽ばたいて行ってください。

昔、ある経済学者がこんなことを言いました。「人はなぜ未来を予測できると考えるのか。それは、未来といえども過去の延長上にあると考えるからだ。では人はなぜ、未来を予測したいと考えるのか。それは、未来は過去の単なる延長ではないと考えるからだ」。皆さんがこれまで大学で学んできたことは、皆さんの未来にかならずや豊かな果実をもたらすことでしょう。大学で教わったときは、よく意味がわからなかったことも、そのときが来れば、先生方がなぜあれほど力をこめて講義をしたのか、その意味がはっきりとわかるはずです。そういう瞬間に、皆さんはこれから何度も遭遇すると思います。大学で過ごした日々が、かならずや皆さんの未来を、しっかりと支えてくれるでしょう。

他方で皆さんの未来は、皆さん自身で作らなければならないものです。大学生活でできたこと、できなかったこと、いろいろな思いがあることと思います。それらをひとまとめにして、未来はまた一から自分で作ることができるのです。もちろん、他の人びととの関わりや、周りの人びとへの配慮を忘れることはできません。皆さんは大学生活を通じて、こうした事柄の大切さについても、多くを学んだことと思います。

どうぞ大学生活の思い出を糧に、思い切り張り切って、皆さんの未来を築いて行ってください。

中央大学卒業を祝して



理工学部長
梅田 和昇
UMEDA Kazunori

中央大学を卒業する皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんの人生の中でも大きな節目となるこの時を迎えられたことを、心よりお祝いいたします。

多くの皆さんの中央大学での人生は、まさにコロナ禍と共に始まりコロナ禍と共に終わるというタイミングでした。コロナ禍が幸いにもほぼ収束したことで、我々も後ろを振り返る余裕が出来たかと思います。4年前を思い出すと、皆さんそれぞれに少しずつ異なった感慨深い思いを頂くことと思います。我々は、コロナ禍で、何を失い（あるいは失わず）、何を得たのでしょうか。この大きな節目を迎えた今、コロナ禍に翻弄された中央大学での生活だけでなく、それより以前のこともじっくり振り返ってみてはいかがでしょうか。そうして皆さんのこれまでの人生の振り返りを踏まえ、前をしっかりと向いて、人生の次のステージに力強く踏み出して欲しいと願っています。

恐らく、振り返りの中で、皆さんのこれまでの人生で多くの人達との関わりがあったことにも思い至ると思います。我々人間は、人とのつながりの中で人生を紡いでいく社会的な生き物です。皆さんが今後も多くの人達との出会いを通して、人生をより豊かにされていくことを願っています。また、その時に、中央大学在学中に築いた人とのつながりを、是非忘れずにいて欲しいと思います。大学生や大学院生の時に培われたつながりがいかにその後の人生にとって変わらず貴重なものであり続けるか、私も今この年齢になって痛感しています。また、もう一つ、最近強く感じるのが、中央大学を卒業した方々の熱い思いとつながりの強さです。在学中に会ったことがなくても、世代やキャンパスが違って、同じ中央大学の卒業であるというだけで、たちまち打ち解けて良い関係を築くことができます。

中央大学は、特に卒業生まで含めたネットワークは、恐らく皆さんが今思っている以上に素晴らしいです。是非中央大学卒業であることに誇りと自負と自信を持って、今後の人生を歩んで行って下さい。

皆さん、改めまして卒業おめでとう！

時代の転換点を超えて



文学部長
緑川 晶
MIDORIKAWA Akira

ご卒業おめでとうございます。皆さんが過ごした4年間は、大学にとっても、日本だけでなく世界にとっても大きな転換点だったと思います。

コロナウィルスの蔓延により、2020年春の入学式は対面での開催は叶いませんでしたが、その後に開催された「歓迎・激励セレモニー」やInstagramでのOB・OGからのメッセージ動画などを通じて、唯一無二のスタートとなったことでしょう。ようやく開始された授業はオンラインではありませんでしたが、学生・教員の双方が手探りながらも、徐々に新しい学びの形を築き上げてきました。

海外ではロックダウンにより行動が強制的に制限されましたが、日本では「緊急事態宣言」により「自粛」が求められ、街中から人々が姿を消すこともありました。マスク、PCR検査、ワクチン接種を巡り、社会の脆弱性や問題点が明らかになりました。

大学生の皆さんも最初は、ウイルスの正体が不明で、先の見通せない不安な日々を過ごしたでしょう。それでも皆さんは立ち止まることなく、新しい形の大学生活を送り、学習面ではオンデマンド教材を最大限に活用し成績を上げた学生もいたようです。サークル活動でもSNSを駆使して勧誘を続け、活動を途切れさせることなく継続できたようです。対面での授業が徐々に再開されたとはいえ、マスク姿が新常态となりました。

4年生になって、ようやく第5類に移行しました。コロナ禍が完全に終息したわけではないものの、大学や街中には再び活気が戻つつあります。しかし元の状態に戻ったかというところではなさそうです。大学の授業では一定数のオンライン授業が残され、異なったキャンパスの学生と一緒に授業を受けています。就活の面接もオンラインで行われることも増えました。このように時間や空間を気にせず活動できるようになったのは、まさに「人間万事塞翁が馬」と言えます。

終息がまだ見えないため、これが転換点の最中なのかその後なのかは不明ですが、将来の歴史の教科書では大きな転換点として記されるでしょう。そして、転換点後の歴史の新しいページを刻むのは皆さんです。

大学で学んだこと、これから学ぶこと



総合政策学部長
堤 和通
TSUTSUMI Kazumichi

日本が優勝を飾った昨年のWBCでは、「憧れるのを止めましょう」という声掛けが話題になりました。日本代表でWBCを戦う選手たちが、野球に掛ける歩みの中で憧れ、対戦を夢に見たであろう、アメリカ代表の大リーグ選手への思いを試合の間封印しよう、という声掛けでした。この声掛けは話題になり、その試合結果で優勝を手にするになりましたが、このような声掛けは、憧れを持って夢中で追いかけてきたことを意味するものでもあります。

憧れを持って追いかけて夢中になるとき、出来るまで何度も試み、出来たときに喜びを感じ、次のステップを踏み出し、また出来るまで何度も試み、出来れば喜びを感じます。この中で次第に力をつけ技は磨かれ、有力な選手へと育っていくものと思われます。そのとき、ふたつのことが起きています。一つはできたのかがその分野で通用するスタンダードで判断される、ということです。左打者への内角高め投手の見逃せばストライクか、ボールになるときには打者が手を出してしまうとき「出来た」といえるでしょう。もう一つは、挑戦し出来ることになることに固有の魅力を感じ、喜びを感じていて、出来たときの様々な報酬や出来なかったときの罰や不利益が主たるインセンティブになっているわけではない、ということです。

こうした営みはスポーツに限らず、学問や文芸の領域にも広がるものです。このような能力の伸張、喜びの経験は内的善と称されます。皆さんが学部生で進めた学びはそれが本物であれば内的善であるはずで、内的善が徳に結びつくのはここで述べたことにも示されています。能力の伸張や喜びが内的善の営みである場合には、分野で通用するスタンダードを受け入れ、それに達していなければその事実を率直に認め、スタンダードを上回るライバルを称賛する—内的善はこのような徳を伴います。

皆さんの学部での学びは内的善の営みであったことと思います。加えて、総合政策学部が政策と文化の融合を掲げるのは、自身の見方がすべてであり、決断を見直す余地がない、というのではなく、しっかりと見つめ決断を下しながら、別の見方を容れ、バランスがとれるように決断を見直すことが肝要である、と考えるからです。これは賢慮と呼ばれます。皆さんが学びにある内的善を知る者として、それに加えて、賢慮のはたらきを知る者として、社会に出て行かれることを祝します。ご活躍を期待しています。



国際経営学部長
中迫 俊逸

NAKASAKO Shun-itsu

I would like to sincerely congratulate all the people who graduate from Faculty of Global Management, Chuo University (GLOMAC) this March on behalf of our faculty members and office staff.

Please remember that GLOMAC has been focusing on “Knowledge into Action.” I wish that all of our new graduates will remember what you had learned at Chuo and will apply them into practice.

When you have some wishes to be realized, you need to make others, especially your bosses and your colleagues to actually understand and perceive that you have been patiently keep trying to achieve your goals. I would like to focus that you need to read books and journals to catch up with the current and future conditions. Building up experience only will not cover everything you need. Taking a further degree at a graduate school or attending seminars for professionals may help you to open up a new way of life. Please have an open mind to obtain new and unnoticed knowledge and information, and please try to look at things not only from your perspective but also from different viewpoints.

You are not alone. You are supported by a lot of people including your guardians, relatives, friends, and people you had met at Chuo. They are one of the valuable assets you have. When you look for a better future, the main responsibility should be taken by you, but I would like to focus again that you are not alone and a lot of people around you will be able to support you when you need some help. When you see somebody needs your help, please provide support for those.

I would like to congratulate you for the successful graduation again in the highest term.



国際情報学部長
平野 晋

HIRANO Susumu

国際情報学部二期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。学部創設・運営の責任者として、この日を迎えることが出来たことを心よりお慶び申し上げます。

思えば皆さんが入学した2020年度は、パンデミックが世界規模で猛威をふるい、不安もあったことと思います。教職員一同も、これまで経験したことのないような遠隔方式による授業や学部運営を、十分なリードタイムもない中で準備し実施せねばなりません。文字通り国民の全てが、そして世界中の人類全体も、苦しい環境の中で、日々為すべきことを為す生活を強いられました。そのような状況の中に於いても、勉学を継続し修得すべき知識と考え方を修得して学位取得に至った皆さんを、私達教職員一同は、誇りに思います。

ところで〈情報の仕組み〉をとりまく環境は、皆さんの在学中にも目まぐるしく変化しました。皆さんが2年生から3年生の頃には、〈メタバース〉が世間の注目を浴びていたことを、皆さんも未だ覚えているでしょう。しかし、それ程に盛り上がった〈メタバース〉人気が、皆さんが4年生に成る頃にはすっかり影を潜めて、〈生成AI〉が世界の耳目を全て奪ってしまいました。そのように非常に短期間に変化する情報の仕組みに、皆さんはものおじすることなく取り組んで、新たな〈情報の法律〉の在り方についての思考を深めてくれたことと思います。そのような新興技術の出現に対応できる皆さんの基礎力と応用力を、社会や大学院等に於いて存分に発揮して活躍して欲しいと私達教職員一同、心より願っております。

最後に、有名なアメリカの法学者ロスコウ・パウンドの言葉をお伝え致します。それは私の第二の母校である——第一の母校はもちろん中大ですが(笑)——コーネル大学ロースクールの模擬法廷に掲げられていた以下の名言です：

“Law must be stable and yet it cannot stand still.”

法はぶれてはならないけれども、止まることもできない。

この言葉同様に、皆さんがiTLを卒業した事実は、「情報の仕組みと法の統合知」に基づく能力を有しているという、決してぶれることのない証です。ですが皆さんは、ここで止まることも出来ません。コーネル大では卒業式を“Commencement”と呼んでいるように、卒業は終わりではなく次のステップへの「始まり」なのです。皆さんも、ぶれることのない能力を十二分に活かして、立ち止まることなく次のステップの「始まり」を歩み出して下さい！

引き継ぎ、〈iTL〉の伝統を！